

慢性痛
急性痛

藤井洋泉先生の今月のカルテ

vol.105

ペインクリニックの現場から



■プロフィール ふじい・ひろみ 平成2年岡山大学医学部卒業後、同大学医学部麻酔科蘇生科入局、岡山労災病院麻酔科、岡山大学医学部附属病院麻酔科蘇生科などを経て平成19年から現職。日本麻酔学会指導医。日本ペインクリニック学会認定医。現在、国際疼痛学会、日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会などに所属

榎木病院麻酔科・ペインクリニック科の香賀我部義則先生と藤井洋泉先生が、痛みの治療や緩和についての情報を届けてくれる「ペインクリニックの現場から」。今回から2回にわたり、藤井洋泉先生が腰椎（ようついで）椎間板ヘルニアについて話をしてくれま

育椎（せきついで）は、椎椎間板ヘルニアです。へルニアが起りやすい体という骨が繋がって構成されています。その椎体と椎体の間で、クッションの役目をしているのが椎間板です。椎間板が何らかの原因により変性して、突き出した状態が

ヘルニアは、突出という意味のヘルニエーションと、つまり、椎間板ヘルニアは、椎間板が突出した状態を表しています。育椎には、頸（けい）椎、胸椎、腰椎があり、どこにでも椎間板ヘルニアは発生しますが、今回は、腰椎に発生する腰椎椎間板ヘルニアを中心にお話します。

診断は、問診から始まりですが、これがとても大切です。ヘルニアを疑わされる症状で重要なのは、①ひざより下に放散する痛みがあるか②神経の走行に一致した痛みがあるか③咳や、くしゃみ

で痛みが悪化するか④発作性の痛みなのかの4つです。次に理学・神経学的検査を行います。下肢伸展上テストがヘルニアの診断に有用です。これは、足を真っすぐ伸ばした状態で股関節を曲げた時に、足に痛みが誘発されるかどうかを診るテストです。股関節を曲げる角度が70度未満で痛みが出た場合に、テストは陽性として、腰椎椎間板ヘルニアが疑われます。このことは、治療を開始するにあたり考慮しておく必要があります。

腰椎椎間板ヘルニアの診断は問診がとても大切
ヘルニアのサイズが小さく膨隆型は、縮小・消失は期待薄

お答えは、榎木病院（北区西花尻）の藤井先生です。☎086(293)3355代